

**成人若年 ASD 女性をとりまく複合的な抑圧の構造と克服に関する研究**

○ 元筑波大学大学院人間総合科学研究科障害科学専攻 川島正恵 (009251)

ASD 女性・ジェンダー・社会適応

**1. 研究目的**

本研究の目的は、成人若年 ASD 女性の障害特性から生じる自己と社会による抑圧という二重の抑圧の構造に着目し、その克服の過程を明らかにすることである。ASD 者に限らず、人はジェンダー構造が深く埋め込まれた社会に生きており、それを内面化することによって、社会の中で認められ、円滑に生活を営むことができる。しかし、ASD 者は、神尾が述べるようにコミュニケーションの質的な障害や身体的過敏性及び不器用等がある（神尾, 2010）。そのため、女性に関しては、社会が求める「女性らしさ」にのりきれないことが往々にしてある。実際に、ASD 女性の当事者たちが自著で、「女性らしさへののりきれなさ」について述べている（綾屋, 2012；森口, 2014；ホリデー, 2002）。また、ASD 女性に関する研究も徐々に蓄積されてきている（栗山, 2013；Cridland, 2014；笠原, 2009；砂川, 2014；綾屋, 2012）。このように、ASD 女性の特性による葛藤は少しずつ明らかにされてきている。だが、ASD 女性ゆえの困難さにジェンダーの視点を加味した ASD 女性自身と社会による二重の抑圧の構造については、まだ明らかにされていないといえる。そこで、成人若年 ASD 女性であることの困難さをジェンダーの視点から捉え、成人若年 ASD 女性の障害特性から生じる自己による抑圧と社会による抑圧という二重の抑圧の構造を明らかにする。またあわせて、対象となる ASD 女性たちの抑圧構造における ASD の特性とジェンダーロールとの葛藤の克服の過程を明らかにする。

**2. 研究の視点および方法**

成人若年 ASD 女性が自己の障害特性と社会から求められるジェンダーロールがかみ合わない状況に対してどのように思っているかとどのようにそのことを克服しているかを明らかにすることを目的とし、知的障害のない 23 歳から 30 歳までの ASD 女性 5 名に対して半構造化面接を行った。面接時間は、それぞれ 1 時間程度であった。その際、面接内容は調査対象者の同意を得て IC レコーダーに記録した。分析は、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて行った。分析に先だって分析テーマを設定し、それに基づいて分析を進めた。テーマは、「女性らしさと障害特性との折り合いづけの過程について」とした。分析テーマ設定後の具体的なプロセスは、木下, (2003) を参考に、分析テーマに照らしてディテールが豊富で具体例がありそうな箇所に着目し、データの中のコンテキストを重視して、ある程度まとまりのある文に注目をした。そして、他のデータにも類似した例がないか探し、概念を精緻化した（木下, p168-169）。

### 3. 倫理的配慮

倫理的配慮として研究に先立ち、調査対象者に口頭と書面で説明を行い、書面にて同意を得た。なお、本研究は筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を得て実施した。

### 4. 研究結果

修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析の結果、成人若年 ASD 女性たちは<定型発達女性社会へのなじめなさ>と<「女性像」の消化困難>という2つのジェンダーに関わる困難さを抱えていた。1つ目に関しては、成人若年 ASD 女性たちは、定型発達女性とのコミュニケーションにおいて、興味関心のズレおよび、自身は異なっているという認識をもっているため、女性たちのコミュニケーションの輪の中に入れず、そして入ろうとしないことが語りから明らかになった。また、成人若年 ASD 女性たちは、定型発達女性に対して、恐れや遠慮といった忌避感情を抱いていることもわかった。同時に定型発達女性も輪の中に入ろうとせず、興味関心の合わない成人若年 ASD 女性に対して忌避感情を抱いていることがインタビューから推察された。2つ目については、主に社会から女性に対して要請されている化粧や「女性らしい」とされる身だしなみをするに対して成人若年 ASD 女性は面倒くさいものと感じ、また、そのことに関して困難さを抱えて生活していることが明らかになった。成人若年 ASD 女性は、障害特性上、日々生活することで手一杯であり、また、女性らしさに沿おうと努力をしても身体過敏により、難しい場合がある。そのような困難さを<女性らしいふるまいへの憧憬と葛藤>から<困難さの積極的消化>へ、そして<必死の生存戦略>へと変化させていると考えられる。

以上の<困難さの積極的消化>と<必死の生存戦略>によって、周囲の人々に<態度の軟化>が起こると考えられた。また、時の経過や女性に ASD があることを周囲が認知する事、そして、成人若年 ASD 女性が理解者に出会うことによって、結果として<態度の軟化>が生じていた。

### 5. 考察

これらのことから、成人若年 ASD 女性は障害特性上、ジェンダーロールに沿うことが難しく、社会からの無言の抑圧を受けてきたが、困難さを前向きに捉え、生存戦略として行動を変える事によって周囲の人々の接し方を変え、自身も受容される感情を得るようになっていった事が示唆された。また、成人若年 ASD 女性自身が自らジェンダーロールと折り合いをつけていることが明らかになったと考えられる。